

佛敎學研究 第七十六号 抜刷  
令和二年三月十日 発行

称名寺聖敎 『往生礼讚光明抄』 について

佐  
竹  
真  
城

# 称名寺聖教『往生礼讚光明抄』について

佐 竹 真 城

## 問題の所在

小論で扱う『往生礼讚光明抄』（以下、『礼讚光明抄』と略称）とは、神奈川県称名寺所蔵（神奈川県立金沢文庫管理）になる国宝称名寺聖教のなかの一書である<sup>①</sup>。

本書は、古目錄類にはその名を見ることができず、しかも撰号を欠いているため、厳密には撰者が詳らかでない。しかしながら、昭和の調査で顕出されて以降、同じく「光明抄」と題する著作を有していることから、法然門下の覚明房長西（一一八四—一二六六）による撰述であると考えられている。そして、長西の著作の殆どは早くに散逸したと考えられていたため、研究者の間では長西教義を窺う上で重要な典籍であると認識されてきた。ところが、未だ詳細に内容を論じた研究は確認できない。したがって、慎重を期するならば、題号の一部が一致するだけで長西撰述であると判定するのは、聊か飛躍が過ぎると考えるべきであろう。翻って考えれば、撰者が長西であると確定できたならば、長西教義研究に必要な文献ということになる。

そこで小論では、本書に説かれる特徴的な思想を紹介し、その説示から本書の撰者が長西であることを確定させたい。その上で、本書が長西教義研究のみならず、中世浄土教研究に大きな役割を果たす可能性を持つことを提示したい。

一 『礼讚光明抄』に言及する先行研究

はじめに、本書に言及する先行研究を確認しておきたい。

塚本善隆博士「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀観の鎌倉古鈔本」(『浄土学』巻五/六・五七五頁、一九三三年)

(26) 往生礼讚光明抄三卷の内、第二、第三、長西撰(推定)、永源手沢、湛睿所持本、

表紙に

往生礼讚光明抄三卷内第二百日没  
第三説後序

とあり、先の(9)観経疏光明抄に欣浄沙門長西録とあるによつて、法然門下の高足覚明房長西の撰なることは、殆んど疑ひなし。本書は末部を逸したれば、奥書を得ずと雖ども、「観経疏光明抄」及び、次の同一撰者、同一書写人の「法事讚の疏」と共に、文永五年、六年の頃京都にて書写されたものであることも推定せられる。

・岸章二氏「金沢文庫所蔵『観経疏光明抄』玄七第五(?)同序三第一の本文及びその解説と光明抄研究の一問題」(『宗学研究』巻一一、一九三五年 ※二重山括弧内は筆者加筆)

又こゝに今師といふは善導を指してゐる如く、『観経疏光明抄』、『法事讚』及び『礼讚』の『光明抄』にあつては、善導呼ぶに今師若くは和尚の略称を用ひ、元祖法然上人を呼ぶに上人なる敬称を用ひてゐる。(一五四頁)

『礼讚光明抄』第二七丁に『礼讚』<sup>十二</sup>丁右の「諸衆生今日晨朝各誦六念」の文の六念を解釈してゐるが、他の釈が極めて個別的簡結叙述であるのに、六念の釈に於ては甚だ委細で約一枚半に亘つてゐる。(一五九頁)

又『礼讃光明抄』第三(合廿一丁右)にも如上の『観念法門』を挙げてこの義の然らざる旨を「私云此義不爾在別可見」とりつてゐる。(二六二頁)

『礼讃光明抄』第三(合廿一丁右)に「私云此義不爾云々在別可見」といふは、恐らく『玄義分光明抄』第三丁左の私釈を指摘してゐる様に思はれるが故に『礼讃』は『玄義分』より後に講せられられてゐると推せらる。又『定善義』の『光抄明』『光明抄』は逸失したか未だに発見せられないが、『礼讃光明抄』第三(合廿四丁左)に「委在定善義抄可見」とあるから『礼讃』よりは『定善義』は早く講せられてゐる。(一六九頁)

こ、聖問『決疑鈔直牒』卷六(『浄全』卷七・五四〇頁)に指す疑芥とは、『浄土疑芥』即ち『光明抄』であるかは現在『玄義分光明抄』が十八願加減の文のあるところを欠失し、『観念法門』には『光明抄』なく、残存の『礼讃光明抄』十八願加減の文の下に積にも見出し得ないので容易に決し難いが、その思想としては『礼讃光明抄』第三(合丁左)に「疑云称我名号者积経何句、歎答乃至十念句也謂先標称我号、次乃至积下至十念积十声」と同じであつて、乃至をば諸行より念仏に至る言葉として第十八願の乃至十念に諸行を合せしむる為めの積であることは明かである。(二七〇頁)

・安井広度博士『法然門下の教学』(一九三八年「一九六八年複刊」) ※二重山括弧内は筆者加筆)

(7) 『浄土疑芥』

『群疑論疑芥』第七卷の内題に「浄土疑芥通申諸経部 群疑論第七」と記し、『観経疏序分義光明抄』の初に「浄土疑芥別申小経部 善導法事讚」と記す所を見ると、彼『長西』には「浄土疑芥」と題する大部の浄土教に関する著述があつたやうに察せられる。全部で何巻あつたか解らないが、……『法事讚』、『礼讃』、『論註』等の鈔を残してゐる。(二六六頁)

さて、乏しき文献に依て長西の業成論を窺ふと、彼は常に至誠心を以て業成を論じたるが如く……『礼讃光明抄』には、『浄土論』の一心を解して、

一心者浅深分齊如何。答、勇猛強盛心也、業事可成并故、此即至誠心也。

といひ……一般に勇猛強盛の心を以て修する時に往生の業事が成弁する意味なるや、又、欺かる行を以て業成に供すべき業となす意味なるや、今一つ明かならぬものであるが、思ふに、彼の四修本位の考からすると、それは恐らく後者の意味に解すべきではなからうか。(七四一―七五頁)

・石田充之博士『日本浄土教の研究』(二一九―三〇〇頁、一九五二年) ※二重山括弧内は筆者加筆)

(6) 往生礼讃光明抄三卷(二、三卷の一冊存)(右同《金沢文庫蔵》)……一連の『浄土疑芥』と内題する講義録と推測されるもので、門弟の私解等が加えられているが、大体その《長西》著と推定される。

・石田充之博士『法然上人門下の浄土教学の研究』巻下(七八―七九頁、一九七九年) ※二重山括弧内は筆者加筆)

(6) 往生礼讃光明抄 三卷(第二、三卷の一冊現存) 永源手沢本澁睿所持《『金沢文庫蔵』の脚註あり》……一連の『浄土疑芥』と内題する長西の講義録と推定されるもので、門弟の私解等が加えられているのであって、大体長西師の思想内容を伝える著述であると思惟して宜しいであろう。

・『浄土宗大辞典』(巻一・一六三頁、一九八〇年)

おうじょうらいさんこうみょうしよう【往生礼讃光明抄】三卷。長西撰。善導の『往生礼讃偈』の注釈書。

昭和初期に金沢文庫から見出だされたもので、表紙に「往生礼讃光明抄三卷内第二自日没第三迄後序」とあり、三卷の中の第二・第三卷であることが分る。末部を欠いており作者名などを見ることはできないが、同じく金沢文庫

蔵の「観経疏光明抄」(文永六年永源書写本)と『法事讃(光明抄)』(文永五年永源書写本)は長西の著であることが明記されていることから、本書も長西の著で一二六八―一九年(文永五・六)ごろ永源によって書

写されたものと考えられる。長西の諸行本願義研究には欠かすことのできない書である。

・吉田淳雄氏「長西の著作について」(『仏教論叢』巻四四・九七頁、二〇〇〇年 ※二重山括弧内は筆者加筆)

④ 往生礼讚光明抄は、第二・三巻のみ現存する。外題は

往生礼讚へ光明抄三巻内へ第二自日没／第二訖後序

とあり、巻二は十三葉で日没偈から日夜偈までを積し、巻三は後夜偈から後序までを扱っており、十九葉が現存するものの巻尾一葉程度が欠けている。

この②《観経疏光明抄》③《法事讚光明抄》④は奥書より、文永五年から六年(一二六八―九)にかけて永源なる者が洛北一条万里小路の阿弥陀院にて書写したものであることが知られ、その後どういう経緯を辿ったのか不明だが、金沢称名寺の二世湛睿の所持本となった。

・『新纂浄土宗大辞典』(一一一八頁、二〇一六年、執筆・石上壽應氏)

おうじょうらいさんこうみょうしよう【往生礼讚光明抄】二巻一冊。長西撰、永源書写、湛睿手沢。諸行本願義の立場から書かれた『往生礼讚』の註釈書。同じく金沢文庫所蔵の長西撰『観経疏光明抄』『法事讚光明抄』の書写・手沢が本書と同一人であること、両書の書写年代が長西入寂直後の文永五―六年(一二六八―一二六九)であることから、同時期の長西撰と推定される。また表紙の記述から第一巻が欠如していることが分かる。

如上、何れも本書の撰者を長西とし(一部推定を含む)、その貴重性・重要性に言及している。しかしながら、「長西の諸行本願義研究には欠かすことのできない書」等の高い評価を与えられながらも、内容にまで言及したのは岸氏の論攷のみである。その岸氏も中心は『観経疏光明抄』にあつたため、十分に研究されてきたとは言い難い。

二 『礼讃光明抄』の書誌情報と価値

つぎに、『礼讃光明抄』の書誌情報を表に整理した上で、先行研究の見解も踏まえ、改めて本書について纏めておきたい。

表紙	装丁	丁数	法量	奥書	備考
中央「往生礼讃 <small>光明抄</small> 三卷内 <small>第二自日没第三訖後序</small> 」右下「湛睿」左下「永源（花押）」	綴葉装	三二丁（卷二：一三丁、卷三：一九丁の合冊 <sup>③</sup> ）	縦寸・二八・六糎、横寸・二〇・七糎 <sup>④</sup>	「文永五年八月十六日／礼讃三卷内第二」（※／は改行位置）	※卷二：日没讃（大経）「礼讃阿弥陀仏十二光名求願往生一十九拜当日没時日没時礼」（『聖典全書』卷一・九一六頁）から初夜讃（大経）・中夜讃（十二札）「余悉同上法」（『聖典全書』卷一・九三五頁）までを註釈。 ※卷三：後夜讃（願生偈）「第四謹依天親菩薩願往生礼讃偈」（『聖典全書』卷一・九三五頁）から晨朝讃（彦琮）・日中讃（観経・広懺）・後序（後述）「既有此増上誓願可憑」（『聖典全書』卷一・九五九頁）までを註釈。

本書は、標題が示すように、善導（六一三—六八一）撰『往生礼讃偈』（以下『礼讃』と略称）の文言に対して、「●●等事」と小分けにして見出しを立て、註釈を施したものである。表紙には「三卷内」とあり、卷二の奥書には「礼讃三卷内第二」との一文を有することから、本来は三卷本であったことが分かる。所釈の文に目を向けると、卷二は日没讚（大経）の「礼讃阿弥陀仏……日没時礼」（『聖典全書』卷一・九一六頁）からはじまり、卷三は後序（後述）の「既有此増上誓願可憑」（『聖典全書』卷一・九五九頁）で終わっている。六時の礼讃文から後序にかけて一通り註釈が施されていることが知られ、同時に卷一は前序の註釈であったことが窺える。なお、卷三は最後の註釈文が中途半端に途切れていることから、おそらく末尾の一、二丁あまりが欠失していると推察する。

本書の成立時期は、卷二に「文永五年八月十六日」との書写奥書を有していることから、一二六八年以前に遡ることができる。『礼讃』の註釈書のうち成立の早いものとしては、浄土宗鎮西義第三祖良忠（一一九九—一二八七）撰『往生礼讃私記』二卷（一二七六年頃成立<sup>⑤</sup>、以下『礼讃私記』と略称）や、浄土宗西山義の行観（一二四一—一三二五）撰『往生礼讃私記』三卷（一二九八年以降成立<sup>⑥</sup>）などが知られている。また、称名寺聖教のなかには良忠の『往生礼讃聞書』一卷（以下『礼讃聞書』と略称）なる一書を確認でき、しかも康元元（一二五六）年の奥書を有しているから、表面上は『礼讃聞書』が最古の『礼讃』註釈書であると見ることができ。しかし、書写奥書の年号をそのまま成立と目することは一概には首肯できないことと、称名寺聖教に含まれる良忠の『観経疏聞書』<sup>⑦</sup>には長西の『観経疏光明抄』の影響を看取できることが指摘されている点から、『礼讃』註釈においても本書の成立の方が早いと考えることも可能であろう。両書の成立の前後に関しては、『礼讃聞書』の本文内容を踏まえた詳細な検討を要するものであり、今後の研究が待たれるところであるが、その点を考慮したとしても、本書を現存最古級の『礼讃』註釈書と位置づけ、『礼讃』註釈史における最初期の撰述とすることに疑いの余地は



ないだろう。

如上の点から、教学的に重要な要素を含む『礼讃』前序の釈を欠くものの、その成立時期より見て貴重・重要であるとの評価に異論はないだろう。そして、従来言われるように撰者が長西であるならば、その価値はさらに高まることとなる。よって、次項では撰者長西説を検証する。

### 三 撰者長西説の検討

本書の撰者は、標題から長西と推定されていることは前に述べた通りであるが、書写者については、表紙に名が見える永源なる人物と推定できる。永源が如何なる人物であったかは知られていないが、今日金沢文庫で管理される称名寺聖教のなかには永源書写本が数点確認でき、それらと照合してみると、やや癖のある筆跡は全く一致する。そして、永源書写本の殆どが長西の著作であることも、撰者を長西と比定する一材料となっている。しかしながら、これらは外的観測からの見解に過ぎない。本項では、内的証拠すなわち本書に説かれる思想から撰者長西説を検討してみたい。

#### (一) 「執持名号」釈

まず『礼讃光明抄』には、次の如く特徴的な説示を見て取れる。

尋云、執持名号者観称中何歟。答。不レ及ニ疑慮、称名也。爰以諸師一同釈一称名一也。難云、経上文説光明无量寿命故名ニアミタ、指レ彼云聞アミタ仏一歟。若爾假名論ニ自性道理ニ觀ニ光明等之功德一故云ニ執持名号一歟。孤山智円正釈ニ執持二字、云ニ信力故執受念力故住持、全不レ云ニ称名一。若爾正観念為レ本、傍通ニ称名一歟。何偏云ニ称名一歟。答。一往此難来、只云ニ執持不レ云ニ称名一故。然レ而持者行義也。持ニ

行名号者、必称为地体也。其上通觀讚事不遮也。自本仏経多含可亘三業。故俱舍等性相云三名句文身依声仮立。故知執持名号尤可称名也。  
 (金沢文庫藏文永五年書写本、卷三・三三丁右一左)

すなわち、『阿弥陀経』所説の「執持名号」について、観念・称名の何れで理解するのか問いを立て、称名であると答えている。しかし、「難じて云はく」として、孤山智円(九七六一〇二二)は全く称名とは説いていないから、観念を本として称名は傍に通じる程度の理解ではないかと重ねて問いを起し、名号を称する者は、称するという行為を地体とした上で、観念に通じることを妨げないとの理解も示している。最終的に、「執持名号」は称名であると断言するものの、「三業に亘ることから観念的な解釈を否定しないのである。

これに類似する議論が、長西撰述書の『法事讃疑芥』にも見られる。

尋云、執持名号者觀称中何歟。答。今釈雖不云ニ称名ニ玄義別時門釈ニ一日七日程ニ仏之名ニ礼讚後序釈ニ一心称レ仏不レ乱。又釈ニ十声ニ十声又釈ニ若称レ仏往生者云々。諸師皆以如レ此也。難云、今聞説アミタ仏者指テ上光明寿命无量故名ニアミタ仏之説也。若爾者執持名号者聞ニ観念之境、謂可レ觀ニ光明寿命等ニ故。何云ニ称名ニ歟。又付ニ経之文言ニ執持二字不ニ必聞ニ称名ニ如何。答。難勢実ニ爾也。但論藏性相云ニ名句文身依声仮立。故名号必可ニ口唱之也。雖レ爾堅著共不レ可ニ偏。經論文言多含付ニ執持名号ニ可有ニ三業之行也。是以諸師解釈迥々也。  
 (金沢文庫藏文永五年書写本、卷三・三二丁左)

ここでも『礼讃光明抄』と同様の問答を展開し、表面上は称名の義を取りながらも、観念的に解釈していく義を完全否定していない。そして、経論の文言は多岐にわたり、「執持名号」においても三業の行があるのだから、一つの見解に執着すべきではないと述べている。

この両見解は大変に似通っていることが分かるが、左の如く対照すればより明らかである(対照の便をはかり、訓点および句読点は省略し、適宜改行や傍線処理を施した)。

『礼讃光明抄』

尋云執持名号者觀称中何歟

答不及疑慮称名也爰以諸師一同釈称名也

難云經上文説光明无量寿命故名アミタ指彼云聞アミタ仏歟若爾仮名論自性道理觀光明等之功徳故云執持名号歟孤山智円正釈執持二字云信力故執受念力故住持全不云称名若爾正観念為本傍通称名歟何偏云称名歟

答一往此難来只云執持不云称名故然而持者行義也持行名号者必称为地体也其上通観讚事不遮也自本仏經多含可巨三業故俱舍等性相云名句文身依声仮立故知執持名号尤可称名也

如上、文言が完全に一致しているわけではないが、一見して両書の説示が類似し、論理構造にいたっては全く同じであることが分かる。

(二)念仏理解

『礼讃光明抄』には、次の如き問答を見ることが出来る。

尋云、今念仏者觀称中何歟。答、付眞身観念仏衆生文有二解。一々向称名念仏也、二一向觀察念仏也、三広巨三業念仏。今云、観念々々仏也。委在定善義抄、可見云々。三部經中称名本願文未見之。観仏本願者尤観經第十三観分明者哉。

(金沢文庫蔵文永五年書写本、卷三・二五丁左)

『法事讃疑芥』

尋云執持名号者觀称中何歟

答今釈雖不云称名玄義別時門釈一日七称仏之名礼讚後序釈一心称仏不乱又釈十声十声又釈若称仏往生者云々諸師皆以如此也

難云今聞説アミタ仏者指上光明寿命无量故名アミタ仏之説歟若爾者執持名号者聞観念之境謂可觀光明寿命等故何云称名歟又付經之文言執持二字不必聞称名如何

答難勢実□爾也但論藏性相云名句文身依声仮立故名号必可口唱之也雖爾堅著共不可一偏經論文多含付執持名号可有二業之行也是以諸師解釈辺々也